面接からみえてきた「ふつう」の意味

佐野予理子[1]・黒石憲洋[2]・生井裕子[3]
([1]清泉女学院大学・[2]日本教育大学院大学・[3]桐朋学園女子部門)

問題　日本人は周囲と良好な関係を維持するため，人並みであること，「ふつう」であることに価値を置く(元橋, 1993; 大橋・針原, 2000)。人を形容する語としての「ふつう」を検討した大橋・山口（2005）は，日本人が思い描く「ふつう」の人の特徴とは利他性が高く自己主張する能力がやや低いという，良好な関係の維持に役立つ特性であることを示した（大橋・山口, 2005)。一方で，文脈によっては平凡である・個性的でない等の意味で「ふつう」が用いられることもある。「ふつう」という語がどのような文脈でどのような意味合いで用いられるか，またその際の個人の内的状態を明らかにするためには定性的研究が必要だと考えられる。そこで本研究は「ふつう」という語自体の持つ多様さに着目し，日常的に用いられる「ふつう」という語が持つ意味合いについて探索的に面接調査を行った。

方法　女子大学生 47 名(平均 19.38 歳，*SD*＝1.09)を対象に半構造化面接を行った。面接で尋ねた内容は以下の通りである。1)「ふつう」の概念について，2)「ふつう」／「ふつう」でないことを意識するとき，3)「ふつう」のときの心情，4)「ふつう」の良い面／悪い面，5)「ふつう」の意味・機能。

結果および考察　回答者の逐語記録をもとにそれぞれの項目内容に関して分類・整理を行った(表 1)。「ふつう」概念については，多数と同じであることや常識，平和な毎日を思い浮かべる人が多かった。「ふつう」を意識するのは，多くが日常場面であることが示された。個人の心情に関しては，「ふつう」を意識するときに安心感を抱く一方で，却って不安になることもあることが示唆された。このことは，個人が「ふつう」をどのように捉えているかによると考えられる。すなわち，「ふつう」をどのように捉えるかによって個人の意識や心情に与える影響が異なることが想定される。「ふつう」には関係を調和させる意味があることから，良好な人間関係を維持する上で重要な機能があるものの，それは突出しないでみんな一緒という状態をもたらし個性のなさの裏返しにもなる。今後，様々な文脈を取り上げながら，そこでの「ふつうさ」と個人の内的状態との関連や「ふつう」の意味合いについてより詳細な質的検討が望まれる。

表 1．発話の分類

	カテゴリ	具体例	発話数
「ふつう」概念	多数と同じ・常識	周りの人と同じ，常識・マナーがある	18
	平和な毎日	家族がいて，友だちがいて，仕事して，という生活	15
	平均・真ん中	上でも下でもない，良くも悪くもない，真ん中	9
「ふつう」意識	日常場面	何も起きないとき，家族といるとき	20
	社会的比較場面	人と違う意見を持ったとき，成績や能力が問われるとき	11
	特殊な人との遭遇	おしゃれな人やすごい人を見たとき	9
	他者の視線の意識	親に指示されるとき，人に見られているとき	7
心情	安心感	ほっとする，安心する，穏やか	19
	アンビバレント	安心するときもあるがつまらないと思うときもある	10
	何も思わない	可もなく不可もなく，何も感じない	7
	不安・ネガティブ	みんなができることが自分は「ふつう」だと不安，悲しい	5
良い面	良好な人間関係	協調性がある，その場に合わせられている	30
	平等・安定・平和	同じような生活をしている幸せ，平常心でいられる	9
悪い面	没個性	個性がない，特徴がなくなる	27
	刺激がない	刺激がないので向上しない，活発にならない	8
「ふつう」の意味	基準	「ふつう」は基準になる	12
	関係の調和	周りとうまくやっていく	9
	幸せの反映	幸せな日常を送れる	6
	規範・常識	ルールや社会の規範	4